広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	王船山「倣昭代諸家體（三十八首）」所収の「顧秀才開雍（慟哭）」詩について
Author(s)	鈴木, 敏雄
Citation	中國中世文學研究 , 56 : 46 - 58
Issue Date	2009-09-28
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051416
Right	
Relation	

王船山「倣昭代諸家體（三十八首）」所収の「顧秀才開雍（慟哭）」詩について

鈴木敏雄

一　王船山の捉えた顧開雍の詩体

王船山は「倣昭代諸家體」（昭代の諸家の体に倣ふ）詩三十八首を作り、劉基を筆頭とする明代（昭代）の著名な詩人三十八名を取り上げ、詩史に於いてそれぞれの存在意義を明らかにする取り組みを「学（倣）……体」型の擬作という形で行なった。そしてその最後に顧開雍という詩人を置いた。顧開雍は、管見の及ぶ限りでは詩史上さほど著名にはなっていない。それを王船山はここであえて取り上げた。なぜか。却って王船山の殊の外の思い入れを感じる所でもある。

先ずはその、「倣昭代諸家體（三十八首）」所収の「顧秀才開雍（慟哭）」詩を見ておきたい。

顧秀才開雍（慟哭）

饞蛟風激怒濤腥　饞（むさぼ）れる蛟は風激しくして怒濤腥く
逝水東傾夜不扃　逝く水は東へかた傾きて夜も扃（と）ざず

無望金山邀北岸　金山の北岸に邀ふるを望む無く
恰逢潮水落皐亭　恰も潮水の皐亭に落つるに逢ふ
烏衣夜色空迷燕　烏衣は夜色に空しく燕を迷はし
碧血中宵欲化螢　碧血は中宵に螢と化さんと欲す[1]
回首五雲蟠御寢　五雲の御寢に蟠るに回首すれば
斷腸鵑哭向冬青　鵑の哭して冬青に向かふに断腸す

この「顧秀才開雍（慟哭）」詩は、何よりも先ず、史実による典故を多用するのを一つの特徴とする。たとえば三、四句目、および七句目にそれは顕著である。恐らくは顧開雍の詩体がそうであったのを承けていよう。

三句目の「金山」（江蘇省鎮江市の西北にあり）[2]は、南宋の韓世忠がこの山の下で金の頭目である兀朮を迎え撃ち、名馬を差し出すからと退路を譲るよう懇願されている。王船山は『宋論』巻九で「撻嬾、兀朮、人異其志、金山之匹馬、且以得返爲幸、……」（撻嬾、兀朮は、人は

其の志を異にするも、金山の匹馬は、且く返るを得るを以て幸と為し、……）と触れ、また同じく巻十四でも「乃至兀朮直搗建康、立馬金山、東陥四明、南馳豫章、……」（乃ち兀朮の直ちに建康を搗ち、馬を金山に立て、東のかた四明を陥れ、南のかた豫章に馳するに至り、……）と触れているが、それは、「（高宗建炎）四年夏四月、烏珠（兀朮）入境、自明州回歸。韓世忠先屯焦山、以邀其歸路。烏珠遣人約日會戰。世忠伏兵擊之、俘獲甚衆、及其舟千餘艘、敵終不得濟、復使致詞、願還所掠益、以名馬求假道。世忠不從、與相持於黄天蕩。世忠以海艦進泊金山下、將戰。……」（（高宗の建炎）四年夏四月、烏珠（兀朮）境に入り、明州より回帰す。韓世忠先づ焦山に屯し、以て其の帰路を邀ふ。烏珠人をして日を約して会戦せしむ。世忠兵を伏して之を撃ち、俘獲すること甚だ衆く、其の舟に及んでは千餘艘、敵終に済るを得ず、復た詞を致さしめ、掠益する所を還し、名馬を以て道を仮るるを求むるを願ふ。世忠従はず、与に黄天蕩に相持す。世忠海艦を以て進みて金山の下に泊め、将に戦はんとす。……『文獻通考』巻一百五十八「兵考十」車戦）という史的出来事に基づいている。

また、四句目の「皐亭（山）」（浙江省杭州市北の郊外にあり）は、南宋の都臨安（杭州）防守の要隘であった山であるが、いよいよ元の兵が迫ると、南宋の君臣はここで玉璽を渡し、投降してしまっている。王船山は『黄書』で「……亦何至延息海濱、乞靈潮水、皐亭納璽、碙島沈淵、終使奇渥呑舟、乾坤霾塞、濱百年而需遠復哉。」（……亦た何ぞ息を海浜に延ばし、霊を潮水に乞ひ、皐亭にて璽を納め、碙島にて淵に沈み、終に奇渥をして舟を呑ましめ、乾坤は霾塞し、浜すること百年にして遠きより復るを需むるに至らんや。）と触れている。それはやがては元の兵に追撃され、南宋最後の端宗皇帝が南の「碙島」（碙洲）で卒するという結末を招くことになる（碙門の禍）。その史実をここで用いている。

七句目の「五雲」は五雲城、すなわち金の北地にある五国城をいうものと思われる。北宋の徽宗（および息子の欽宗）は金人の俘虜となり、ここで囚死している。徽宗は北宋最後の皇帝であるが、『宣和遺事』前編に拠れば、奸臣の言葉を聞くなという張天覚の諫言を聞き入れず、その天覚を悶死させ、寵臣の林霊素の妄言の方を聞き入れて仏教を弾圧したために、神仏となった天覚や僧侶がその幻に現れ、「陛下看看遭囚被虜、由自信邪臣。……向五國城忍寒受餓」（陛下の看す看す囚はるるに遭ひ虜せらるるは、自ら邪臣を信ずるに由る。……五国城に向いて寒きを忍び餓うるを受く）、「徽宗無道之君、看看被擄」（徽宗は無道の君にして、看す看す擄せらる）という不吉な予言をされる。そしてその僧侶には「道君好道寵林靈、天下伽藍盡滅形。極樂上元歡事罷、看看身死五雲城。」（道君道を好んで林霊を寵し、天下の伽藍尽く形を滅す。極楽の上元歓事罷はり、看す看す身は死す五雲城）という句まで詠まれる。この詩句中の「五雲城」は、その予

言の中の幽閉地「五國城」に同じであろう。王船山はこの史的出来事あるいは逸話を踏まえている。

これら史実に基づく典故を多用することにより、王船山は顧開雍の詩体を承け、そのテーマである北南両宋王朝の滅亡時に志半ばで怨みを呑んで亡くなった忠臣烈士の慟哭を詠んでいる。

「萇弘之血變成碧珠、杜宇之魄化爲子鵑」（萇弘の血は変じて碧珠と成り、杜宇の魄は化して子鵑と成る）と『華陽國志』にも言うように、禅譲を受けることになる後継の鱉靈に蜀の治水の功績と地位とを譲り怨みを呑んで亡くなった杜宇（望帝）の魂が化して杜鵑になったとあるが、血を吐いて哭くその哀声（不如帰）は別離の苦を催し、聞くに堪えないという。王船山は「慟哭」のテーマをその故事に集約させるが、結句で杜鵑が冬を凌いで凋まない常緑の「冬青」（和名そよご）[3]の傍らで慟哭するというのは、それは王船山の詞「鷓鴣天（杜鵑花）」に、次のようにある。

鷓鴣天（杜鵑花）

錦國春從恨裏裁、雲安涪萬淺深開。山頭萬片留芳影、枝上三更結怨胎。[4]紅淚滴、血函埋、他時化碧有餘哀。傷心臣甫低頭拜、爲傍冬青一樹栽。

（錦国の春は恨裏より裁たれ、雲安・涪・萬は浅深開く。山頭の万片は芳影を留め、枝上は三更に怨胎を結ぶ。紅涙滴り、血函埋もれ、他時碧と化して餘哀有り。傷心の臣甫低頭して拝し、為に冬青一樹を傍へて栽う。）

この詞は、鳥が花の設定に変わり、萇弘と杜宇（望帝）とが混合されているが、杜宇の魂につかえ拝することを詠んだ杜甫の「杜鵑」詩「西川有杜鵑、東川無杜鵑。涪萬無杜鵑、雲安有杜鵑。我昔游錦城、結廬錦水邊。有竹一頃餘、喬木上参天。杜鵑暮春至、哀哀叫其間。我見常再拜、重是古帝魂。……」を踏まえる。これに拠れば、王船山の詞の末句に「為に冬青一樹を傍へて栽う」といい、擬作の結句に「鵑の哭して冬青に向かふ……」というのは、志半ばで怨みを呑んで亡くなった者の魂を悼む者の存在を詠んでいる。

詩意は概ね、次のようになろうか。

「長江に怪しい風が吹き起こって波まで腥く、時は流れゆき止まることがない。名馬を手土産に道を譲るよう迫る金の兀朮を鎮江の金山で迎え撃った北宋の韓世忠のような名将の姿は望むべくもなく、杭州浙江の霊験あらたかな潮が皐亭山下から退くとともに南宋王朝は玉璽を放棄してしまった。貴人たちは暗闇の中で戸惑うばかりであり、忠臣烈士の血は夜中に蛍火に変わろうとしている。金の北の奥地の五国城で囚われの身となった北宋の徽宗皇帝（および息子の欽宗皇帝）の寝所に雲が立ちこめていたのを思い返すにつけ、死節を貫き怨みを呑み血を吐いて絶えた忠臣烈士の慟哭に心傷めるばかりであ

る。」

王船山はこのような形式と内容とで擬作し、顧開雍とその詩体を自らの企図する明詩史の最後に位置づけようとしたと思われる。では顧開雍を、王船山はどのような詩人として捉えようとしていたのであろうか。

二　王船山『明詩評選』載録詩に見る顧開雍とその詩体

顧開雍は字を偉南といい、華亭（上海）の諸生である、と王船山『明詩評選』は記している（「顧開雍、字偉南、華亭諸生」）。そしてその詩を何首か載録し、その中で「……崇禎以來、天下作者唯孤與使君耳」（……崇禎以来、天下の作者は唯だ孤と使君とのみ）、「……故知偉南是向上人」（故に知る偉南は是れ向上の人なるを）とも評している。明の崇禎（一六二八－一六四四）の頃に活躍した人物であると思われ、恐らくは王船山（一六一九－一六九二）とも活動時期がある程度重なるのではないか。

なお、萬暦（一五七三－一六二〇）の頃に活躍し、袁中郎ら三袁とも親交のあった顧天埈（字は升伯）も「開雍」と号するが、その「顧開雍」とは別人である。顧天埈は崑山の人であって、称するならば「顧太史天埈」となるべきであり、[5]「顧秀才開雍」と称するやや後のこの「顧開雍」とは自ずと異なる。

今、その「顧秀才開雍」の方の詩について見ようとする時、陳田『明詩紀事』、朱彝尊『明詩綜』、錢謙益『列朝詩集』、汪端『明三十家詩選』等はいずれも載録せず、王船山『明詩評選』と清朝の『御選明詩』とが僅かを載録している。[6]

そのうち、王船山『明詩評選』は詩形ごとに載録する。

楽府は「東飛伯労歌」一首を載録し、「無一誕語、無一澀語。無曰此亦不難、操觚時自知冷暖」（一つの誕語も無く、一つの渋語も無し。此れ亦た難からずと曰ふ無かれ、操觚の時自ら冷暖を知らん）との評を付ける。

歌行は「天目話舊同方穉華兪再李」、「柳生歌」、「遊天台歌」の長篇三首を載録する。この歌行の詩形は、後述するように、或いは顧開雍の面目躍如たる所であったかも知れない。王船山はそれぞれ、「天目話舊……」詩には前掲の「……崇禎以來、天下作者唯孤與使君耳」との評、「柳生歌」には「聲情不屬長慶、正使點序自有驚濤舞雪之妙」（声情は長慶に属せず、正に序を点じて自ら驚涛舞雪の妙有らしむ）との評、「遊天台歌」には李白の歌行の雅、杜甫の歌行の俗をともによく習得しようとしているとし（元白長慶体の歌行には属さないという意味を含め）、前掲の「……故知偉南是向上人」との評を付ける。これらの評語からは、王船山が顧開雍の歌行の文学を元白よりも李杜に近いものと見ていたことが知られる。とりわけ、後述する「天目話舊……」詩の評「……崇禎以來、天下作者唯孤與使君耳」からは、開雍の歌行に船山が共感を持っていたらしいことも見えてくる。

そのほか、七絶は「雲都詞」一首を載録し、「舉止自大」

（挙止自づから大なり）との評を付ける。

ところで、これら『明詩評選』の載録状況からは、顧開雍の取り組みも僅かではあるが浮かび上がってくる。もちろん、あくまでも王船山の捉え方であり、現存作品は決して多くなく、十全ではないが、それでも船山が擬作する際に基調としたと思しき詩の一、二を、特定できなくもない。そのうち、もっとも可能性のある一つは、やはり歌行体の「天目話舊同方穉華俞再李」（天目にて旧を話す。方穉華、俞再李に同す）詩である。

この詩は、南宋が都とした臨安（杭州）にほど近い天目山に恐らくは顧開雍が滞在していた時、その天目山の伝説を踏まえて詠んだものであると考えられる。王船山の擬作は七律であり、この詩は長篇の歌行体であって、モデルと看做すには詩型が随分異なるが、後述するテーマや「風波」「杜鵑」「回首」等の使用語彙には双方の関連性が認められる。

天目話舊、同方穉華・俞再李

雨夜飲君酒　雨ふる夜に君に酒を飲ましむれば
疏鐘動戍樓　疏鐘戍楼を動もす
芙蓉幔亭久羈客　芙蓉の幔亭羈客たるを久しくすれば
鴻雁嘹嚦寒江頭　鴻雁嘹嚦として江頭に寒し
欲言不能我且醉　言らんと欲するも能くせず我且らく酔へば
風波黯淡當清秋　風波は黯淡として清秋に当たる
憶昔妖雲障牛女　憶ふ昔　妖雲牛女に障るに
天南斥堠俱平楚　天南の斥堠は俱に平楚たるを
翠華千騎竟西巡　翠華の千騎竟に西のかた巡り
杜鵑仍聽三更雨　杜鵑仍りに聴く三更の雨
至今野老長呑羞　今に至るまで野老は長く羞を呑み
殘笛萬里悲君侯　残笛万里君侯を悲しむ
降書已上龍城幕　降書は已に上る龍城の幕
東山舞宴排九斿　東山の舞宴は九斿を排く
一朝烽舉三山外　一朝烽は挙がる三山の外
南冠絡繹相鉤帶　南冠は絡繹として相鉤帯す
駝酥坐地吹胡笳　駝酥は地に坐して胡笳を吹き
回首長春悵空靄　回首すれば長春空靄なるを悵む
誰家身手好兒郎　誰が家の身手ぞ好児郎
田横有客恋扶桑　田横に客有り扶桑を恋にす
夫人匕首漸離筑　夫人の匕首　漸離の筑
俯仰天地哀菁芒　天地を俯仰して哀しみて菁芒たり
飲君酒、登君堂　君に酒を飲ましめ、君を堂に登らしむれば
蝋燭紅燒夜未央　蝋燭紅く焼けて夜未だ央ばならず
眞人釣龍遲南陽　真人龍を釣らんと南陽に遅つも
子陵山水何其長　子陵の山水何ぞ其れ長しや

天目山は、東西二つの峰を持ち、それぞれの頂上にともに池があって、二つ合わせて天の目のように見えるの

でその名があるという。その天目山が、南宋も末期の度宗の咸淳十年（一二七四、甲戌）八月、大雨で崩れ、池の大水が（おそらくは土石流を伴って）渓流沿いに流れ下り、その豊かな水量を水源としていた安吉、臨安（杭州）、餘杭等の都市を大洪水に巻き込む。

しかも、大災害に見舞われることとなったその南宋の都臨安（杭州）は、折り悪しく、西方の長江上流域の四川や湖北方面からすでに元軍も迫っており、二年後の恭帝の徳祐二年（一二七六）正月、趨勢に持ちこたえられず、結局、臨安近くの皐亭山で元の将軍伯顔に玉璽を渡すことになり、滅亡する。

天目山は臨安（杭州）に水源を供給していることにより、臨安の主峰主山とされ、さらに古来、王気の漂う山とされて来た。[7] その王気が失せたために、南宋は滅んだとされることになる。

その、王気が漂うという伝説は、もともとは晋の郭璞が「天目山」詩を作り、[8]「天目山前兩乳長、龍飛鳳舞到錢塘。海門一點巽山小、五百年間出帝王。」（天目山前両乳長く、龍飛び鳳舞ひて錢塘に到る。海門の一点巽山小さきも、五百年間帝王を出だす『天目山識』）と詠んだことに始まるようであるが、それをたとえば、宋の李有『古杭雑記』では、[9]

晉郭璞「錢唐天目山」詩云「天目山前兩乳長、龍飛鳳舞到錢唐。海門一點巽峯起、五百年間出帝王。」及高宗中興建邦、天目乃主山、至度宗甲戌山崩、京城騒動。時有建遷蹕之議者、未幾、宋鼎遂移。有人作詩云「天目山前水齧磯、天心地脉露危機。西周浸冷觚稜月、未必遷岐説果非。」

（晋の郭璞の「錢唐天目山」詩に云ふ「天目山前両乳長く、龍飛び鳳舞ひて錢唐に到る。海門の一点に巽峰起こり、五百年間帝王を出だす」と。高宗の中興して邦を建つるに及び、天目は乃ち主山たるも、度宗の甲戌山崩るるに至り、京城騒動す。時に遷蹕の議を建つる者有るも、未だ幾くならずして、宋鼎遂に移る。人有り詩を作りて云ふ「天目山前水磯を齧み、天心地脉危機を露はす。西周浸（やうや）く冷ややかなり觚稜の月、未だ必ずしも岐に遷らずの説は果して非なり」と。）

と記載し、天目山が大雨で崩れたことを、王気の消失と結びつけ、宋の滅亡を象徴する新たな伝説を形成している。明の田汝成『西湖遊覧志餘』所載『委巷叢談』にも類似の記載がある。

杭州山脈發自天目。然天目有東、有西。東天目之脈、萃於餘杭、結局於徑山。西天目之脈、萃於錢唐、結局於西湖。故天目者、杭州之主山也。王氣鬱葱、帝王奠宅、而錢氏偏霸。宋室南遷、兆不誣矣、度宗時、天目山崩。識者曰「天目崩、地脈絶、潮不應、

水脈絶。國事去矣。」或有爲之詩云「天目山前水嚙磯、天心地脈露漁谿。西周冷浸孤陵月、未必遷岐説果非。」信乎、天目之興廢有關于杭州也。

（杭州の山脈は天目より発す。然れども天目には東なる有り、西なる有り。東天目の脈は、餘杭に萃まり、径山に結局す。西天目の脈は、銭唐に萃まり、西湖に結局す。故に天目なる者は、杭州の主山なり。王気鬱葱として、帝王宅を奠むるも、而も銭氏のみ偏へに霸たり。宋室南遷するに、兆誣ひざり、度宗の時、天目山崩る。識者曰く「天目崩るれば、地脈絶ち、潮応ぜざれば、水脈絶つ。国事去れり」と。或ひとに之が為に詩に云ふ有り「天目山前水磯を嚙み、天心地脈漁谿を露はす。西周冷ややかに浸す孤陵の月、未だ必ずしも岐に遷らずの説は果たして非なり」と。信なるかな、天目の興廃に杭州に関はること有るや。）

この新たな伝説は、さらにたとえば、次の元の陳廷言「錢塘懐古」詩のような、天目山の崩落と宋王朝滅亡とを関連づけた文学を生む。

錢塘懐古

越水呉山共寂寥、已無遺老話前朝。海門三日潮聲歇、天目千年王氣消。……

（越水呉山共に寂寥、已に遺老の前朝を話す無し。海門三日潮声歇き、天目千年王気消ゆ。……）

右掲の顧開雍「天目話舊……」詩も、このような文学と軌を一にしていると思われる。

「天目話舊……」詩は、そもそもは隋の薛道衡の楽府「出塞」其二に基づいて作られている。テーマ及び構成のほか、「夫人」「妖雲」「胡・笳」「萬里」「秋」「龍」「烽」「動」等の語彙の使用も薛道衡の楽府と明かな共通点を持つ。もちろん薛道衡が匈奴に対する漢の攻防を題材にしているのに対し、顧開雍のはそうではなく、宋の元に対する降服を題材にしてはいる。すなわちいずれにしてもテーマの根底に王朝の交替が盛られている。

これらの観点から、前掲の「天目話舊……」詩をもう一度見てみると、ここに顧開雍の取り組んだと思われる一つの詩体が見えてくる。

顧開雍は知人二人とともに天目山に在り、天目山伝説を想起して、宋の滅亡を詠み始める。

……憶昔妖雲障牛女、天南斥堠俱平楚。翠華千騎竟西巡、杜鵑仍聽三更雨。

元軍が南下し、西方の四川や湖北を攻略し始めた折り、天子の親衛隊（名将孟珙（もうきょう）の派遣などを指すか）は西巡し応戦したが、戦果は芳しくなく、怨みを含んで哭く杜鵑の声を真夜中の雨の中で聞くという結果に陥る。

至今野老長呑羞、殘笛萬里悲君侯。降書已上龍城幕、

東山舞宴排九斿。

やがて抗戦虚しく、王気は消失し、「龍城」すなわち匈奴祭天の場から来ている者たち（元軍）に宋は旗を降ろし、降服して玉璽を渡す。

一朝烽舉三山外、南冠絡繹相鉤帶。駝酥坐地吹胡笳、回首長春悵空靄。

そしてまもなく、南方のこの臨安の地に於いて「駝酥は地に坐して胡笳を吹く」という、元の実行支配が始まることになる。

そこで顧開雍は、

誰家身手好兒郎、田横有客恋扶桑。夫人匕首漸離筑、俯仰天地哀菁芒。……

と詠み、かつて海島に難を避けた田横およびその食客たちや、徐夫人や高漸離らのように報復を志す志士たちのような者たちが居なくなることへの無念を表明することになる。

顧開雍「天目話舊……」詩は、以上のように史的な典故を多用して作詩している点をその詩体の特徴として持つと同時に、テーマとして盛り込んでいるのは王朝交替の際に怨みを呑んで亡くなった者たちを悼む思いであり、それもまた顧開雍の詩体の形成に大きく関わっている。もちろんそれは、典故通りの漢や宋の北方からの侵攻を受けた際の犠牲者達をそのまま傷むのではなく、自らの明王朝の滅亡に際し落命した同様の者たちをこそ喩えていることは言うまでもない。そして主としてその二点が（残っている詩歌は極めて僅少ではあるが）顧開雍の詩体の特徴の一つとして浮上してくる。少なくとも王船山はそのような特徴を顧開雍の詩体であると捉えていたであろうことは言えるのではないか。だからこそ船山は顧開雍のそのような詩体を（七律ではあるが）摸倣し、その文学を明に翳りが見えはじめた崇禎年間以降の唯一優れた作として顕彰し、且つ『明詩評選』のこの詩の論評で、

序事簡、點染稱、聲情凄亮、命句渾成、時詩習氣、破除盡矣。崇禎以來、天下作者唯孤與使君耳。

（事を序しては簡、点染は称ひ、声情凄亮にして、句を命じて渾て成り、時詩の習気は、破り除かれて尽きたり。崇禎以来、天下の作者は唯だ孤と使君とのみ。）

と言い、「凄亮（凄凉）」なる思いは自らと同じであると、共鳴共感を露わにしたものと思われる。

すなわち、宋など歴代王朝の滅亡に題材を取り、それを史的な典故に仕立て、そこに明王朝の滅亡時の無念を

詠み込むというのが、王船山が捉える顧開雍の詩体の特徴であると言えよう。

それを王船山が設定する擬作の「慟哭」というテーマから捉え直すと、「天目話舊……」詩の中にその語は直接は見あたらないが、「杜鵑仍聽三更雨」の句が擬作の結句「斷腸鵑哭向冬青」と相俟って、「杜鵑（の哭する）を聴く」を予定していると見ることができることから、杜鵑の哭き声を聴く時、それに国難に殉じた者たちの無念の声を代弁させているであろうことは自ずと知られよう。

なお、顧開雍には他に、同じく長篇の歌行体である「柳生歌」がある。これも一部に王朝の滅亡に触れる内容が詠み込まれているので、顧開雍の詩体の特徴が現れていると言える。

「柳生」は明末の「談論を善くするもの」（講釈師）柳敬亭のことで、その特技の講釈をふんだんに活用し、明王朝滅亡時に清軍の南下を避けて南に僑居してきた士大夫連に「方海内無事、生所談皆豪猾大侠・草澤亡命、吾等聞之笑謂『必無是。乃公故善誕耳。』孰圖今日不幸竟親見之乎」（方に海内は無事、生の談ずる所は皆豪猾の大侠・草沢の亡命にして、吾ら之れを聞きて笑ひて謂ふ『必ず是れ無し。乃ち公故より善く誕はるのみ』と。孰か今日不幸にして竟に親ら之れを見るを図らんや）と言わしめている。[10]

顧開雍も「柳生歌」で、柳生が稗官の役目を果たした人物であることから詠み起こし、

柳生歌

廣陵柳生眞好奇　　広陵の柳生は真に好奇
千年野史口説之　　千年の野史は之れを口説す
……　　……
是時江左稱太平　　是の時江左太平を称するも
楚豫已見萑苻兵　　楚豫は已に萑苻の兵を見る
柳生獨言報讎亡命事　　柳生のみ独り報讎亡命の事を言り
聽者咸能感動心怦怦　　聴く者は咸能く感動して心は怦々たり
……　　……

と言って、「萑苻」すなわち沢中で人を劫す盗賊のごとき清軍が江左に迫っている危急を柳生が講釈で南方人に知らせる役割を果たしたと詠んでいる。顧開雍は王朝交替時にそのような働きを担った人物をこの「柳生歌」で取り上げ、志士の残存と王朝滅亡の無念を仄めかす。

それに対して王船山はやはり『明詩評選』で論評を加え、「聲情不屬長慶、正使點序自有驚濤舞雪之妙」と言っていた。「天目話舊……」詩にも「序事簡、點染稱、聲情凄亮、命句渾成、……」との評語を付けていたが、この「柳生歌」に於いても（白居易ら長慶体の歌行とはまた異なり）、王朝交替に無念を懐く顧開雍が、自らとその「凄亮（凄涼）」なる思いを共有する人物を詩歌に詠み込み、

当時のあるいは後世の人々に感動を得させていたことを、王船山は評価する。

三　顧開雍を擬作対象とした王船山の企図

さて、上述の『明詩評選』が載録する「天目話舊……」詩に見た顧開雍の詩体に於いて、王船山が擬作「顧秀才開雍（慟哭）」詩を作成するに当たって参照したと思しき類似表現を確認してみると、「風」や「雲」のほかに、注目される「鵑」があり、およびそれらの表出するテーマに双方の共通性が見出せることが分かる。恐らくは船山はこの「天目話舊……」詩のような詩歌の一篇あるいは数篇をモデルとして擬作したものと思われる。そしてその顧開雍の詩体を「慟哭」というテーマ性の語で括った。王船山が顧開雍を擬作対象とした企図は、この一語に托されていると言えよう。

ただし、「天目話舊……」詩の中には直接的には「慟哭」の語は見られない。恐らくは「杜鵑仍聽」がそれを代弁しているだろうと見るところに止まる。それに、顧開雍自身が「慟哭」をテーマとして詠んだ詩が他に有るかというと、前述の通り（有ったものと推測はされるが）、現存するものが極めて少なく、目下存在は認められない。そこでここでは、それを王船山側に求めておきたい。船山は擬作では開雍の「慟哭」の概念に合わせて詠んでいるはずであるが、勿論、船山自身のそれと開雍のそれとは微妙に異なっているかも知れないことを予め断った上で、論を進めることにしたい。王船山が顧開雍の「慟哭」をどのように捉えたかである。

「慟哭」すなわちここでは「鵑哭す」を用いた詩が王船山自身に一篇ある。それは、船山とも親交のあった極丸老人すなわち明の遺民方以智（一六一一－一六七一）が非業の死を遂げた時、それを悼み哭して詠んだ「聞極丸翁凶問、不禁狂哭、痛定、輒吟二章（傳聞薨于泰和蕭氏春浮園）」（極丸翁の凶問を聞き、狂哭するを禁ぜず、痛み定まり、輒ち二章を吟ず。泰和の蕭氏の春浮園に薨ずと伝へ聞く）詩の第一章である（『六十自定稿』所収）。

聞極丸翁凶問、不禁狂哭、痛定、輒吟二章（傳聞薨于泰和蕭氏春浮園）一章

長夜悠悠二十年　長夜に悠々として二十年
流螢死焰燭高天　流蛍の死焰は高天に燭く
春浮夢裏迷歸鶴　春浮の夢裏に帰鶴を迷はしめ
敗葉雲中哭杜鵑　敗葉の雲中に杜鵑を哭せしむ
一線不留夕照影　一線留めず夕照の影
孤虹應繞點蒼烟　孤虹応に繞るべし点蒼の烟
何人抱器歸張楚　何人か器を抱きて張楚に帰し
餘有南華内七篇　餘して有る南華内の七篇[11]

極丸翁こと方以智[12]は当初、清軍に捕えられ、自刃を選んだにも拘わらず救われた後、復明活動を断念したかを装い、剃髪して（弁髪せず）禅に逃れ（一六五二年）、

二十年間（ことに一六六二年以降の十年間は）廬陵の青原寺などに身を寄せつつ、僧形のまま儒であるという二項統一理論（「二而一、一而二」）などを考案し、その著述に力を入れながら暮らしていた。しかし以前に、かつて縁のあった広西の平楽村が清軍の手に陥ちた際に（一六五〇年）、地域の将校たちから軍を督することを請われ、また平楽村陥落の前年（一六四九年）には朝廷から礼部尚書、東閣大学士に就くよう請われていたこと等もあって、それが再燃してか、もちろん自らは時事には言及せず、役職も拝命してはいないのではあるが、二十年後のこの年（一六七一年）、泰和にある知人蕭伯升の春浮園に匿われている所を案を迫られ、自首し、そのまま舟で惶恐灘まで行き、恐らくは入水自殺したという。[13] 子孫に累が及ぶことを避けてのことだとも推測されているが、いわば非業の死を遂げたに近い。王船山はその悲報に接し、この詩を詠んだという。

方以智について、王船山は『永暦實録』方以智伝（およびそれに基づく羅正鈞『船山師友録』方閣老以智）で、「妻子を舎てて浮屠と為つて去る」までを記録するが、さらに『搔首問』で方以智の「緇（すみ）ぞめを披りて以後」（披緇以後）の青原での生活を記し、「……所延接者類皆清孤不屈之人士、且興復書院、……門無兜鍪之客。……又不屑遣徒衆四出覓資財。……」（……延接する所の者は類皆清孤不屈の人士にして、且つ書院を興復し、……門には兜鍪の客無し。……又た徒衆を遣はして四出し資財を覓めしむるを屑しとせず。……）と言っている。そのような生活を送っていた人物が突然落命せざるを得なかったのである。王船山はその非業の死をこの詩で痛哭したものと思われる。すなわち、以智の復明活動二十年への共鳴共感と志半ばで潰えたその人の無念への痛哭が詩では表明されていることになる。[14]

そこで詩中に見える「杜鵑を哭せしむ」に注目してみると、この表現は、我が庭にある敗葉廬で哭く杜鵑の哀声に方以智の慟哭を聞いていると読める。死節を貫き、儒たるを通して亡くなった以智の怨魄が、「蛍」となり、「鶴」となり、死地春浮園のみならず、「鵑」となってここ我が敗葉廬にも現れ、哭いている。それに対して船山は痛哭しているものと思われる。[15] それは王朝滅亡に当たって怨みを呑んで亡くなった歴代の忠臣烈士の慟哭を捉えた表現に等しいと言えるのではないか。

王船山の「慟哭」の用例は極めて少なく、多くは「痛哭」という言い方で出てくるが、その殆どが、この方以智を哭したこの詩の題のように、人の死を悼んでいる。しかし、詩中で用いられる「鵑哭す」という表現に着目して結論づければ、怨みを呑んで亡くなった者の無念の慟哭を杜鵑の哀声に托していると言えるように思う。すなわち、この「聞極丸翁凶問、……」詩に於いてそうであるように、王船山は顧開雍「天目話舊……」詩に於いてもそれを捉え、さらに擬作「顧秀才開雍（慟哭）」詩に於いて、両宋王朝の滅亡時を詠むことで、明王朝滅亡時

に志半ばで怨みを呑んで潰えた者たちの無念の慟哭を聴くという顧開雍の詩体を顕彰しようとしたのではないか。それが顧開雍を擬作対象とした企図であると考えたい。

王朝交替時の政情不安による国家および故郷の変貌を憂える劉基の詩体への擬作に始まり、国家滅亡時の無念に慟哭して亡くなった遺民を悼む顧開雍の詩体への擬作で終わる王船山「倣昭代諸家體（三十八首）」詩は、船山自身を含む明王朝興亡に左右された者たちの怨念への共鳴共感と哀悼の表明であったと言えるように思われる。

注

（1）忠臣烈士の血は亡くなって三年で碧と化すこと、『荘子』外物篇に見える。その血が蛍と化すことは、注11を参照されたい。

（2）満州語で頭目の意の「兀朮」は「烏珠」とも表記する。

（3）冬青はモチノキ科の常緑喬木で、学名Ilex pedunculosa。別名、凍青。和名はソヨゴ。別名、フラクシバ。

（4）「留」字は全書本では欠字□（匡）となっているが、康和聲『南岳詩文事略』本により補った。

（5）「顧開雍稿」と称する「開雍先生文」が現存するが、これは顧天埈の四書制義である。それには、崇禎の進士陳名夏（字は百史）の序と手評とが付され、馬世奇（君常先生）、韓敬（求仲先生）、艾南英（千子）、宋羽皇、張爾公、および陳名夏自身の評が載っている。また、その評語の中には張大復（元長）、黄汝亨（貞父）、方孟旋らの名も見えていて、明らかに時代が異なる。なお、王船山は『搔首問』で「自萬曆間沈一貫、顧天埈、湯賓尹一流、結宮禁宦寺、呼黨招搖、士大夫貪昧者十九從之、……」と言い、顧天埈を高く評価しない。

（6）『御選明詩』は顧開雍の「滇南月令詞」五首を載録する。

（7）明の高啓「唐昭宗賜錢武肅王鐵券歌」詩に「天目山前異人出、金戈雙舉風烟開」というのは、唐王朝滅亡時に、天目山の王気の下に武肅王となった錢鏐が出たことを言う。土岐善麿『高青邱』（一九四二年、日本評論社）に詳しい。

（8）郭璞「錢唐天目山」詩（あるいは「題臨安山詩」、または「杭州歌」）は、郭璞の詩集には無く、郭璞撰『臨安地志』（または「地記」）に有るという。さらにそこでは後半二句を「海門山起横爲案、五百年生異姓王。」または「海門山氣横爲按、五百年生異姓王。」に作るようである。また別のテキストでは郭璞作とはせず、「天目山前兩乳旁、鸞飛鳳舞下錢唐。兩山空缺横爲案、数百年中出五王。」と詠むものもある。さらに、宋の岳珂の『程史』では「舊傳讖記に曰く」として「天目山垂兩乳長、龍騫鳳舞到錢塘。山明水秀無人會、五百年間出帝王。」という詩を載せる。テキストに異同が多く、今は校訂せず、ママとする。

（9）「李有」は無名氏に作るテキストもある。

（10）柳生の伝および事績については呉偉業（梅村）「柳敬亭傳」に詳しい。また、岩波「中国詩人選集」呉偉業にも触れられている。

（11）この「聞極丸翁凶問……」詩に関しては、高田淳『王船山詩文集』（「修羅の夢」一九八一年、平凡社）、および余英

時『方以智晩節考』（「桐城方密之先生殉難三百年紀念」二〇〇四年、北京三聯書店贈呈版）に詳しい。なお、詩中の「流螢死焰」に関しては、『太平御覧』に引く晋の祖台之の志怪小説に、西晋の懐帝の永嘉中のこととして、「……聚血皆化爲螢火、數千枚縱横飛起」すなわち人のような物の流血が螢火と化した話が載っている。また、結句の「南華内七篇」は、方以智の著『藥地炮莊』を指す（藥地は以智の僧号）。荘子解ではあるが、仏理に借りて詮釈してあり、托すところがあると言われる。

(12) 王船山は、方以智の号は明の羅一峯（羅倫一四三一－一四七八）の「太極丸春」の旨を取ったとし、方以智の僧形のまま儒であるという二項統一の在り方を、その命名の主を存する、すなわち儒たるを存するとも言っている。以智を儒として復明の思いを持ち続けた人物であると評価していることの証となる。なお、「太極丸春」は西湖八景の一つで、羅倫はその「西湖八景」で、西湖の太極山は一九三百里、そこには長しえの春があると詠み、象外は両儀（二）であるが、象中は太極（一）であるという。

(13) 方以智に関しては、余英時『方以智晩節考』の考証および推論による。

(14) 王船山の方以智関連の詩には、他に「極丸老人書所示劉安禮詩垂寄、情見乎詞。愚一往吶吃、無以奉答。聊次其韻、述懷。」詩、「桐城余兼尊昔爲青原侍者歸素以來崎嶇嶺外相値見訪爲録前寄極丸老人詩、仍次原韻贈之」詩（いずれも「六十自定稿」所収）が有る。

(15) 「杜鵑」は死んだに等しい活き埋め状態の王船山自身を喩えるとの見方もできるが、今は取らない。